

令和5年度 岩手県立大学宮古短期大学部

「文理融合データサイエンス教育プログラム」自己点検・評価報告書

宮古短期大学部 教務委員会

令和4年度より、宮古短期大学部では「文理融合データサイエンス教育プログラム」を実施した。この教育プログラムの令和5年度の自己点検・評価結果は次のとおりである。

1. プログラムの履修・修得状況

本プログラムを構成する各科目では、学内の学務システム (Active Academy Advance) によって履修・修得状況を、授業支援システム (WebClass) によって受講者毎の課題提出状況を、出席管理システムによって授業の出席状況をそれぞれ把握することができる。令和5年度の実績は次のとおりである。

プログラムを構成する科目のうち、1年次開講科目は5科目であり修了要件を満たした学生は新入生の71名(新入生の77%)、2年次開講科目は2科目であり1年次開講科目の再履修を含め3名が追加で終了要件を満たし83名(2年生の85%)がプログラムを修了している。新入生でプログラムの修了条件を満たしていない学生においても4つのカテゴリーの内3つのカテゴリーで要件を満たしている学生が新入生の14名(15%)となっており2年次で修了条件を満たすことが期待されている。

2. 学修成果

授業における評価方法が、課題の達成度、内容の理解に基づいている。また学生による授業調査における「授業後の関心」「授業の満足度」の項目を分析することにより、学生自身による理解度の自己評価を把握することができる。これらを統合的に分析することにより、学修成果の把握を行う。

また、これらの結果を担当教員を中心に教員間で共有し、検証することで、本教育プログラムの評価・改善を行う。

3. 学生による授業調査等を通じた学生の内容の理解度

本教育プログラムを構成する授業科目について、学生による授業調査を実施している。調査における「授業後の関心」「授業の満足度」という項目を分析することにより、学生の内容の理解度を把握する。

令和5年度においては「授業後の関心」について、肯定的な評価となる4段階中上位2段階が平均で80%を占めている。また、「授業の満足度」については89%を占めている。このような情報を担当教員を中心にフィードバックすることで、学生の理解度を把握するとともに、理解度向上への改善につなげる。

4. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラムは1年次に開講される7科目（必修2科目、選択5科目）と2年次に開講される2科目（選択2科目）からなる。選択科目の選び方によっては、1年次のうちに多くの学生が本プログラムの修了要件を満たすことができる。一方で2年次に再履修等により条件を満たす学生数は未取得者の13%となっており2年次にプログラムを終了する学生を増やすことが課題としてあげられる。このことに関して、令和6年度以降はカリキュラム改定により、よりわかりやすい履修要件とすることで本プログラム修了生の増加が期待される。さらに履修率が向上するよう学内外への本プログラムの周知と、新入生への履修指導に努めていく。

5. 学外からの視点

・教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本短期大学部の卒業生の就職先は、金融・保険業、医療・福祉、製造業、建設業、情報通信業、卸・小売業、サービス業など、多業種にわたっており、卒業生には、AIをはじめとする最新技術を活用し、新たな価値やあらたな社会を創造することが求められている。本プログラムの修了生が卒業する令和6年度以降からは、企業等へのアンケートなどをもとに本プログラムを改善していく。

・産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

岩手県内の高等教育機関や地方公共団体、経済・産業団体からなる「いわて高等教育地域連携プラットフォーム」による、「高等教育人材の教育及び県内定着促進に関するアンケート調査」によれば、岩手県内の430事業所のうち、約7割の事業所が大学等高等教育機関（大学・短大・高専）に求める教育プログラムとして「数理・データサイエンス・AI・IT教育」をあげている。また、本学の設立団体である岩手県からは、AIをはじめとする第4次産業革命技術を活用し、新たな社会を創造し、岩手県の未来をけん引する人材の育成が求められている。このような社会的な要請に応えるべく、本プログラムの改善していく。

6. 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムを構成する「経営情報概論（1年前期）」ならびに「情報社会論（1年後期）」において、数理・データサイエンス・AIを学ぶことについて、社会での実例等をまじえながら講義することで、「学ぶことの楽しさ」や「学ぶことの意義」の理解の向上に努めている。今後も学生による授業調査等を活用しながらプログラムの改善を続けていく。

7. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

「わかりやすい」授業の評価として、学生による授業調査の「授業の難易度」を参考として取り上げると、令和5年度において「難易度」について、適切な評価となる5段階中中位3段階が平均で86%を占めており学生がちょうどいい難易度と捉えておりわかりやすい授業運営が行われてると推測される。今後とも学生による授業調査等を参考にしながら「分かりやすい」授業となるように改善に努めていく。

以上